

廣福寺だより

2023(令和5)年1月



広大会 親子報恩講にてお菓子タワーのお供え

明けましておめでとうございます。
本年もよろしく願いいたします。

昨年はコロナ禍の中でも寺の行事は例年通り行いましたが、残念ながら、元どおりにできなかったのがお斎です。

ああ、あの濃いめで甘い煮しめ、大根と人参とこんにゃく、ご飯もおいしい。途中で酢の物をひとくち。持ち寄っていたいただいた漬け物もパリパリと……。

みなさんが口をそろえておっしゃるのは、家で同じように作ろうと思っても、同じ味が出ないということです。一度にたくさん炊くご飯、ひとつの鍋でたくさん煮る煮しめ、それがおいしさの秘密だそうです。そして、お互いの顔を見ながら語り合いながら、ゆっくりといただくということ。

実はお参りも同じですね。誘い合わせ、広福寺の本堂に一堂に会し、大きな声でお正信偈を唱和し、いっしょに頷きながら、ご講師のお話をお聞きする。ひとりで本を読んだりするのは違うんですね。「場の力」ということを考えさせられます。

さて、五月の慶讃法会が近づいてきました。ひとりではなく、ともに本山へと歩みを進め、お念仏の歴史に参加しましょう。皆さまにはぜひ、一生に一度は本山佛光寺の満堂の場でお参りの雰囲気味わっていただきたいのです。

報恩講

十一月七日(月)に、報恩講法要がつとまりました。住職登壇ののち、行譜正信偈六首引を唱和しました。

お勤めの後、出雲崎・萬因寺ご住職の高橋速円師からご法話を頂戴しました。

報恩講の恩という字は因と心に分けられます。大きく言えば今日まで生きて来られた中で、いろいろな形で気持ちや配慮をいただいで生きてきたということです。それがご家族であつたり先祖であつたり地域の人であつたり、多くの人の関わりの中で育てられてきたということを知ることです。

報恩講は親鸞聖人の法事です。日常で私たちは、はつきりしないまま慣習として法事を勤めているのではないでしょうか。お経というのは縦系です。抛り所として人生を歩んでいくものですが、その中身をきちんと押さえていかないと何のための法事、何のためのお経かということになってしまいます。

私はお寺に戻る前は東京で仕事をしていたが、東京に限らず世間は比べることの連続です。学歴であつたり会社での評価であつたり子どもの成績であつたり。比べられるた

めに生まれてきたのではないのに、他者と比べて優位に立てば満足し、納得いった人生を送れるのでしょうか。会社で働いていたときにはそうした問いに真剣に向き合っていたなかったように思います。父の死がきっかけで佛寺を継ぐことになりましたが、今になってようやく父に対して「おかげさまでよく往生してくださった」と思えるようになりました。お寺に戻ってこなかったら、私という存在がどうなれば満足いくのかということに、真剣に向き合えなかったかもしれません。

私たちを悩ませるのは常に世間です。世間と比べて、嫉妬し腹を立てていく。高齢になつたご門徒さんが「最近めつきり弱つてダメになつた」とおっしゃっていました。若い頃に比べてできないことが増えたのが辛いのでしょう。ですが言い換えればそれは人生の集大成ともいえるのではないのでしょうか。何十年とかけて肉体を酷使し、様々なご縁の中で育てられて、苦勞もあつたかもしれないが、生きて来られた証なんです。皆様方は唯一無二の作品なんです。ご恩の中、ご縁の中に生きていくということを生活の中の眼に見出すことができれば、弱つてしまつてダメだと言つて自分を卑下することはないのです。

『仏説無量寿経』に「有田憂田、有宅憂宅」

ということばがあります。「田んぼがあればなあ」と思うけど、田んぼがあれば「虫だ病気だ水がない」と憂いごとが尽きません。今の時代は毎日が正月。ごちそうも食べられるし、いい思いもできる。でも、われわれ人間の根本は変わっていない。長命になつたけれど、その命の価値を見いだせているのでしょうかということ。大切な命を生きているということ。精一杯感じられているかということ。うつろな目つきで長生きしても、もったいないのではないのか。お念仏申すということはその原点に立ちかえること。法事、法要の場でお参りすることはそういった根本の問いに向き合っていくことなのだと思います。

(ご法話より一部抜粋)



女性講

十一月十一日(金)に、女性講がつとまりました。月潟・梵行寺ご住職の木村俊尚師にお越しいただき、ご法話を頂戴しました。

来年(二〇二三)は本山で慶讃法会がつとまります。これからつないでいくいのちに尊い意味があるのです。恩というものはいのちの深さと広さに目覚めるということ。あの人には恩があるからと私たちは言ったりしますが、それはあくまでも私個人の話です。仏法での恩とはいのちの深さ、広さ、尊さを私に気づかせてくださることなのです。

聖徳太子の一四〇〇回忌法要がつとまりますが、太子はただ単に昔の人ということではなく、一四〇〇年かけて私たちに寄り添い、仏法の中にいのちの尊さ深さ、人間として生きる悲しみを知らしめてくださった存在なのです。そういう大きなはたらきを確かめています。くという意味で法事は大切な事です。太子に限らず故人が私たちのために心を砕いてくださったんだなということを確認していく、そしてそのことを次に伝えていくという大切な意味もございます。

親鸞聖人の誕生八五〇年の法要もございます。八〇〇年以上前の歴史に触れるということとは現代に生きる我々が、昔の人も人間の本質的な問題に悩んでいたということをおとす。



真覚御門主の伝灯奉告法要もつとまります。これは限りなく続いているいのちと出会う場なのです。この世にあるものはすべて移り変わります。生きている者は言うまでもなく、道具や物であってもこの世にあるものは変わってゆくものです。関わる縁によって変わっていく。だから伝えていくことが大事なのです。

私たちの世界は思い通りにならない苦しいところです。思い通りにならないことが不幸せなのではなく、思い通りにならないことで、深い命をいただいているという事実に気づけない事が悲しく、その事実に見を開いていくものが仏教であり、仏法であるのです。

(ご法話より一部抜粋)

「扉」のバックナンバーがございます。
佛光寺新潟教区の広報誌です。
ご意見・ご感想もお待ちしております。



報恩講「御仏供米」御礼

おぶくまい

報恩講に際しまして御仏供米をいただきました。心より御礼申し上げます。

幕島・京ヶ入の皆様	勘助郷屋 松宮 信一	吉田 武石 元助	京ヶ入 八子喜左衛門	長崎 松井辰左工門	山岸 石井政右工門	麓 近山五左工門	麓 山岸 与一郎	麓 木村郷左工門
			様	様	様	様	様	様





広大会の様子



11/19(土) 親子ほうおんこう

毎年11月は親子ほうおんこうのお参りです。用意したお菓子をタワー型に積み上げ、尊前にお供えいたしました。表紙の写真はその時の写真です。きれいに積み上がり、子供たちも満足の様子です。

お勤めは正信偈を唱和しました。今年のお話は男先生（当院）が行いました。いつもと違ってプロジェクターを用意し、写真やイラストを交えながらの法話としました。



次回は1/21(土) 9:30の開催です



十一月の弥彦菊祭りの期間に合わせて、今年も麓・廣澤弘様より、玄関に菊の鉢植えを飾っていただきました。
お参りに来られた方が、色鮮やかな菊に足を止めてじっくり鑑賞されていきます。
子どもたちも思いがけず菊色の服で写真に収まりました。